

浄土三部経における bhakti 思想について

關 戸 法 夫

Bhakti 思想は、*Rg-veda* より今日に至る迄インド思想一般の底流を走りインド文化の根幹を形作っている

Bhakti 思想史において、紀元前2世紀頃成立と推定される *Bhagavad-gītā* (以下 *Gītā* と略す) は bhakti 思想の発展に決定的な方向を示した¹⁾。紀元後3～5世紀頃成立と考えられる *Viṣṇupurāṇa* に至り bhakti 思想が brahman 一元論と共存する可能性を胚胎し、9～10世紀頃成立と思われる *Bhāgavatapurāṇa* の編纂を見るに至り、bhakti 思想は最高の発展段階に至る。

Bhakti 思想史を便宜上、初期・中期・後期に区分し、*Gītā* 前後より *Viṣṇupurāṇa* 以前までを初期とし、*Viṣṇu purāṇa* 以後より *Bhāgavata purāṇa* までを中期とし、*Bhāgavata purāṇa* 以後を後期とする²⁾。bhakti 思想と他の諸思想との syncretism を分類整理する上で合理的である。

Rg-veda 以来、インド思想一般に一切万物は唯一者に帰するという思惟方法が遍在している³⁾。その延長線上に bhakti 思想は位置するといえよう。専修(帰一)思想は *Mahābhārata* 第12巻の *Nārāyaṇīya parvan* 第231～339章に登場する *ekāntin* を指摘できる。かれらは乳海 (*duhisāgara*) の北方にある *śvetadvīpa* で専一に *Nārāyaṇa* を崇拝する宗派であり、bhakti の心情をもつ *ekāntin* だけが *Nārāyaṇa* を見ることができると説く。かれらは初期 bhakti 思想の顕現者のひとつであろうと推定できる。

初期 bhakti 思想潮流の渦中で、初期大乘仏教経典がどのように影響しあっているかを調べることを筆者の研究課題としている。例えば、如来蔵思想、本覚思想そして念仏思想等である⁴⁾。

bhakti (Pāli: bhatti) は、仏教では、原始・部派経典には知られていたことばであり、大乘に至るに bhakti ということばは消え、後密教経典に至り、再び現われることばである。

浄土経典の編纂者は初期 bhakti 思想下にあるのであり、浄土経典編纂者が bhakti ということばを用いなかったのは、bhakti を殊更に無視もしくは、意識

的に採用しなかったと考える方が妥当であり、仮説施設作業としても普遍性をもつと考えられる。では、なぜ bhakti ということばを用いなかったのだろうか。それは圧倒的な初期 bhakti 思想の前に対峙する仏教圏からの激しい抵抗の足跡であろうと考えられる。

浄土経典に bhakti ということばが用いられなかったという文献学的な理由だけにより、そこに bhakti 思想はなかったと結論づけるのは早計といえよう。逆に、浄土経典になぜ bhakti ということばで用いられなかったのかと疑問をもつ方がより学問的といえるかもしれない。

そこで、歴史的・思想的にも浄土経典と同時代性をもつ Gitā について、念仏思想を軸にして見ていく。念仏思想は文字通り「仏」を「念」ずることであり、「仏」を中心にして救済を願う思想であるが、ここで視座を「仏」より「念」に移して、順次考察していくと、浄土経典における念仏と著しく類似した思想を Gitā に見い出せる。Gitā, VIII, 7, VIII, 8, VIII, 14に最高神 Viṣṇu を「念ずる」(√Smṛ-, anu-√smṛ-, anu-√cint-) ことによって mokṣa (解脱) に達することで強調される。これは念仏の「仏」よりも「念」に重心を置く思想と考えられ、初期 bhakti 思想の萌芽と考えられる。

ひとの臨終時における神への念想を強調して、VIII, 5, VIII, 6, 浄土経典における臨終念仏に思想を一にしており、このような臨終正念は Upaniṣad に由来するであろうと考えられるが、この点に関しては他日に期す。Aum の念称に関して、VIII, 13に、XVII, 24に、Aum の念称について言及している。これは浄土経典における念仏が文献の上では口称の意味にはとられていないけれども、後世、口称の意味に解釈されるに至ったのであろうと思われる⁵⁾。その経過は解明されていない。

次に、同 XII, 8に

na tu mām śakṣase draṣṭum anenāiva svacakṣuṣā divyaṃ dadāmi te cakṣuḥ
pasya me yogam āiśvaram

とあり、最高神 Viṣṇu を観ることができるのは、神より授与された天眼 (divyaṃ cakṣuḥ) をもつことにより、神の全姿を見られるのであり、それは、つまり神への帰投信愛 (bhakti) によってしか観ることができない。神の恩寵である。神より下されるものであり、こちらから上るものではない。

回、XI, 54は

bhaktiā tva ananyayā śakya aham evaṃvidho 'rjuna jñātum draṣṭum ca
tattvena praveṣṭum ca paramtapa

とあり、浄土經典において、仏を念ずることによって仏を観ることができるという思想に通じるものであり、仏が念じ来たれるとする。仏によって逆に念じられることになる。これは念の bhakti 性を示すものであり、ここにこそ初期 bhakti 思想の原点を確認できよう。

しかし、藤田宏達博士が指摘される如く、bhakti という語が一度も浄土經典で使われておらず、一方、Gitā では prasāda もしくはその類語がしばしば用いられるにもかかわらず、それらが浄土經典における如く、信の意義を持ち、念の内容とされる例はないとしている。しかし、Gitā ばかりでなく、Mahābhārata や Rāmāyana や Purāṇa には上記の意味に使われる個所があり、Gitā が Mahābhārata の一章である以上、全体より見れば、prasāda もしくはその類義語が信の意義をもちうるであろうことは論を俟たないであろう。

浄土經典においては、「信」について、śraddhā, prasāda 及び adhimukti の三種の系統の語及び結合語によって表現されているが、これは原始仏教以来の伝統を受けたものである。特に、浄土經典の信が、prasāda や adhimukti を用いて信の表現形態としていることは、仏教本来の信を継承していることを証するものである。一方、浄土經典に於ては、avakalpayati, pratiyati (or pattiyati) という動詞によって表現されている。

「無量寿経」の文に認められる avakalpayanti (3rd. pl.) という語は「阿弥陀経」の石山寺所蔵本によると⁶⁾、この語の imperative avakalpayatha (2nd. pl.) が信の同意語として用いられている。avakalpayati という語は、ava-√kṛp- から派生した causative で、インド文献一般では prepare, do under control, consider という意味をもつのであるが、浄土經典ではこれを信の同意語と見なし、「信頼する」という意味に用いている。「無量寿経」のチベット訳によると、この語に対応するのは yid ches (pa) 「信頼する」という語を与えている。従って、漢訳では abhiśraddadhati, adhimucyante と同意義である。

又、pratiyati または pattiyati については、これは信の同意語として「信受する」という意味と考えられる。これは「阿弥陀経」に現われる語で、六方段の一文において、

汝等、この不可思議な功德の称讃、一切諸仏の摂受と名づける法門を (pratiyatha) 信受しなさい。

とあり、さらに後続に、

śraddadhādhvaṃ pratiyatha mākaṅkṣayatha あなたがたは只今わたくしとかれら諸仏世尊とを信じなさい、信受しなさい、疑念をもってはならない。

とある。漢訳をみると、前者の *pratiyathā* (2nd. pl. Imperative) を羅什は「当信」、玄奘は「応信受」と訳し、後者の場合には、三つの動詞をひと纏まりにして、羅什は「当信受」、玄奘は「応信受領解」と訳している、チベット訳は、後者の相当文が欠落しているが、前者の *pratiyatha* には *yid ches par gyis śig* (信頼しなさい) の訳を附している。従って、漢訳、蔵訳のいずれも *pratiyatha* に信の意を賦与させていることが理解される。*pratiyatha* という語は、石山寺所蔵本によると *pattiyatha* とあり、Sanskrit Texts ではこの両形がともに使われていることは、F. Edgerton が指摘している通りである、動詞語根は *prati-√i-or-√yā-* と考えられるが、この語根から派生して作られた Classical Sanskrit の動詞 *pratyeti* あるいは名詞 *pratyaya* は、インド文献一般においても信の意味で用いられる。Buddhist Hybrid Sanskrit としての *pratiyati* 又は *pattiyati* には、Pāli の比定語として *pattiyāyati* があげられるが、この Pāli が信と同意語に使われている。*pattiyāyati* は後世の信の標準語としては用いられないが、「法集論註」に *saddhā* を説明して「あるいは仏等の諸々の宝を信じ、信受する (*saddahati pattiyāyati*) から信である」という如く、信の意味で用いられている程度である。従って、この語の用法は、原始・部派仏教の伝統を忠実に踏襲したとはいいいかねるが、大衆部系の *Mahāvastu* には *pratiyati* (*pattiyati*) が信の意味で用いられており、また〈般若経〉や〈法華経〉などの初期大經典に頻出する語である。

浄土經典で信を表現する場合に登場する *prasāda* についてみると、これは *Gitā* にもしばしば言及されるが、*Gitā* における *prasāda* は「恩寵」もしくは「澄浄」「安寧」の意で用いられており、浄土經典のように「信」の意を含ませて使う用例はないが、*Gitā* を中に含むを *Mahābhārata* 調べると、浄土經典の如く「信」の意を含ませて使用する例は枚挙に遑がない。ただ、*Gitā* では *prasāda* を「信」の意味に使用しなかっただけである。

初期 bhakti 思想は、紀元前後の北インドにおいてかなり広範囲に影響を与えつつあった唯一神教的信仰形態であり、仏典の用例はこの影響の甚大さを反映したものであろう。原始仏教においては、bhakti という専修的な帰投的信仰に抵抗していたことは、信が心澄浄で表わされ、信が慧 (*prajñā*) と相即している構造をもつことによっても明白であり、初期大乘經典に bhakti が表われないのも、初期 bhakti 思想の影響力を物語るものである。

従って、浄土三部経において bhakti が用いられていない理由は、初期 bhakti 思想への争いであり、抵抗の軌跡である。浄土經典においては、信と慧が並列し

て用いられる。しかし、信と慧が如何に相即するかについては説示されていない。つまり、浄土經典では、信と慧との両者において、慧よりも信に力点を移した經典であろうことを仄めかしている。浄土經典においては、釈尊や諸仏のことは対する信が説かれているが、その中で最も重要なのは、阿弥陀仏に対する信である。それは念仏と結合した形で説かれている。これは原始仏教にも見られる。又浄土經典においては、阿弥陀仏に対する疑念を断尽することこそが真の信を得ることと説く。

極楽往生の根本理念として断疑惑を掲げる。これは原始經典に信は疑惑に対蹠して説かれ仏への疑惑を断ずることが信を信たらしめるものであった。つまり、浄土經典が阿弥陀仏に対する信を仏智の疑惑の断尽をもって表示すること、信と念仏とが結合して説示されるのは、原始仏教以来の伝統的な解釈である。

原始經典に説かれる四不壞淨は「無量寿經」に説かれている。慧より信への変遷の過程で念仏思想を取り入れ、阿弥陀仏への疑惑を断じた信を説くに至る。

「無量寿經」や「阿弥陀經」において成立発達した思想は竜樹や世親などによって論理的整合性を与えられ、「觀無量寿經」の編纂によって、シナ・日本の浄土教へと発展した。

以上結論としていえることは、「浄土三部経」の編纂者は初期 bhakti 思想下にあって、仏教としての信仰形態を堅持しつづけた抵抗者といえよう。

- 1) 徳永宗雄「バクティー神への信愛と帰依」岩波講座『東洋思想』第7巻、インド思想 3, 1989年 pp. 203~235. S.N. Dasgupta, *Hindu Mysticism*, New York, 1977 (6th printing) pp. 113ff R.G. Bhandarkar, *Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems*, Varanasi, 1965 (veprint) p. 28. 藤田宏達, 「原始浄土思想の研究」1970年岩波書店。
- 2) 徳永前掲書参照。
- 3) *Rg-Veda*, VIII, 58, 2, I, 164, 46.
- 4) 上村勝彦「古代インドの宗教ーギーターの救済」NHK出版1995年 p. 16. 日本天台の本覚思想の端緒を bhakti 思想と結びつけて考察している。
- 5) 中村元『ヴェーダーンタ哲学の発展』昭和30年 p. 607, p. 659 参照。同「浄土教の世界思想史的意義」(『大谷学報』第44巻第1号, 968参照)。
- 6) śraddadhādhvaṃ pattiyaḥāvakalpayatha (足利惇石石峙所藏阿弥陀經梵本について)『印度学仏教学研究』第2巻第2号訳 pp. 767-772 Tibet 訳, Sukhāvati-vyūha p. 310, l. 7. 「大正藏」12巻, p. 347b 以下, p. 350a 以下。

〈キーワード〉 bhakti 思想, Gīta, 念仏, 臨終祈念

(東方研究会専任研究員, Ph. D.)